

平成21年度 埼玉古墳群周辺の確認調査報告

佐藤 康二

はじめに

さきたま史跡の博物館では、埼玉古墳群の範囲を確定し指定範囲の拡大を検討するための基礎資料を得るために、行田市教育委員会の協力のもと、平成19、20年度に「埼玉古墳群範囲確認調査」を実施した。微地形の確認、古墳所在の伝承がある地点の調査、將軍山古墳の周堀の位置の確認等の成果があった（西口2009、西口・佐藤2010）。

平成21年度からは、埼玉古墳群と周辺遺跡群との関係を解明し、今後の史跡整備及び調査・研究の基礎資料を得るために、周辺遺跡の分布や立地・地形などの調査を目的とした「埼玉古墳群周辺確認調査」を開始した。平成21年度は埼玉古墳群の南西側の水田域を集中して調査した。ここは塚もしくは古墳の所在の記録が残る箇所である。

調査箇所の選定について

今回の調査対象地である渡柳字陣場地区の古墳の記録については、詳細に検討し、その位置を推定している（杉崎2006）とおり、文献、迅速測図、地籍図等に記載が認められる。隣接地点は平成19年度に調査したが、遺構、遺物は検出されていない。古墳跡の痕跡が果たして残っているのか、削平により全く消滅したのか。「埼玉古墳群周辺確認調査」はそれら遺構の所在する可能性が高い箇所を優先することに決定した。なお、この調査箇所の選定については、考古学の専門家、地元有識者などで構成する史跡埼玉古墳群保存整備協議会に諮り、平成21年7月3日に承任された。

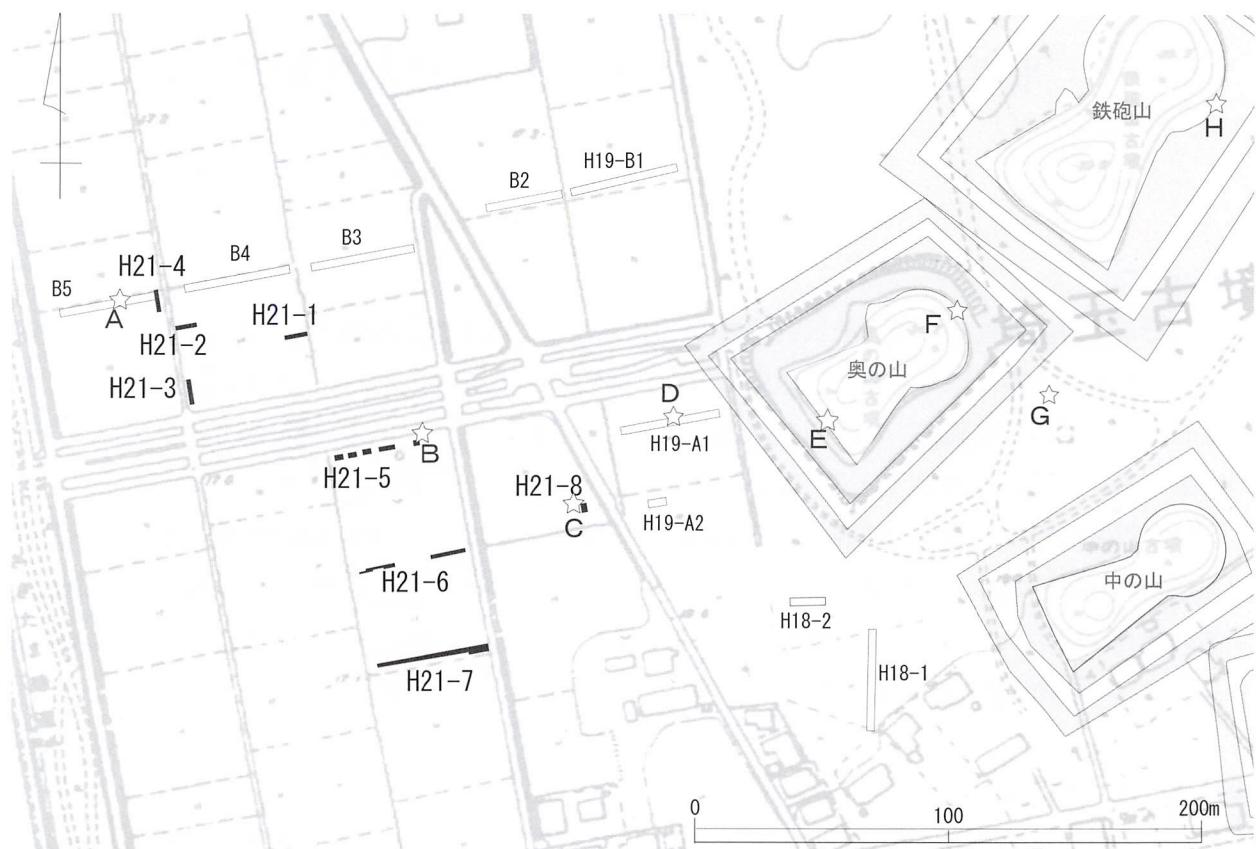
平成21年度周辺確認調査

平成21年7月22日と平成22年2月23～26日及び3月1日の計6日間で計8地点の調査を実施した。調査はいずれも人力により表土掘削を行い、遺構の有無及び地形確認、記録写真撮影、断面図作成、人力による埋め戻しを行った。なおトレンチ平面図等は専門業者に委託してGPSデータ計測により測定した。なお、第5トレンチは土地所有者の承諾を得て、それ以外の調査箇所は県有地のため管理する行田県土整備事務所の承諾を得て調査を実施した。

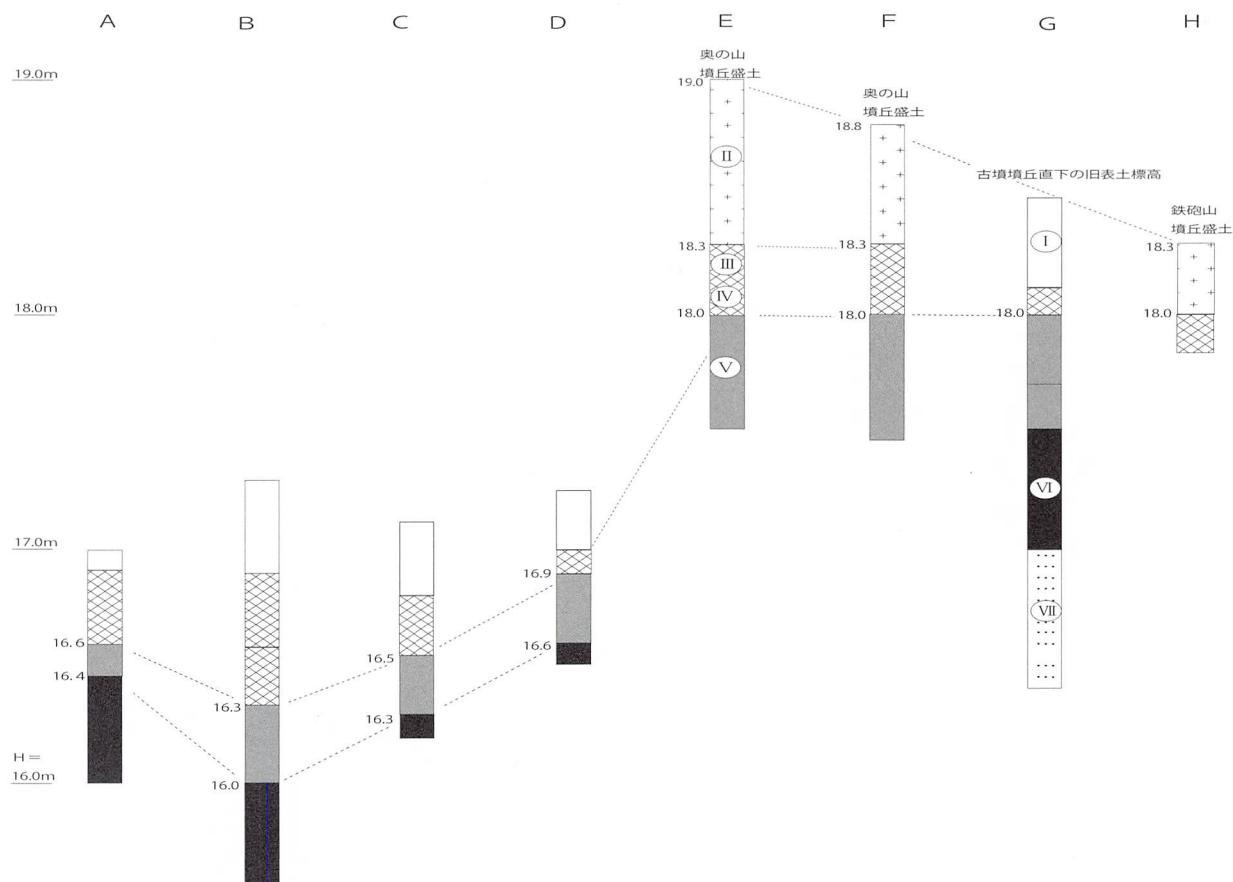
第1トレンチはさきたま緑道の北側約20m、平成19年度B4トレンチ南側20mの位置に設定した。推定「古墳跡ホ」に該当する位置である。長さ8m、幅1mのトレンチを設定した。厚さ30cmの表土直下がローム層であった。ロームはいわゆる水浸ロームで暗黄褐色を呈し、確認範囲では平坦であった。その下層は褐色土となる。遺構、遺物は検出されなかった。

第2トレンチは推定「古墳跡ヘ」に該当する位置である。長さ9m、幅1mのトレンチを設定した。厚さ20cmの表土直下がローム層であった。遺構、遺物は検出されなかった。

第3トレンチは推定「古墳跡ニ」に該当する位置にある。長さ7m、幅1mのトレンチを設定した。第2トレンチの南約20mと至近にあるものの、地表下30cmで検出したローム確認面は北端35cm、南端70cmと南側へ傾斜することが判明した。また1層耕作土とローム面の間に軟質の黒褐色土層が



第1図 周辺確認調査 位置図



第2図 周辺の基本層序柱状図

層厚約20cmで堆積していた。遺構、遺物は検出されなかった。

第4トレンチは推定「古墳跡ト」に該当する位置にある。層序等の整合性のため、北端で平成19年度トレンチと重複させた。南側約半分は地表下20cmでローム面が検出されたが、北側は平成19年度B4トレンチ西端でも検出された細砂質土及び鉄分を多く含むオレンジ色の砂質土がロームを垂直に切り込むように検出された。またその中に木杭が1本残存していた。『史蹟埼玉』(高木1936)所収の「埼玉村全図」には無名塚西側に接するように走る細い水路が描かれていることからも、近・現代の水路跡と考えられる。

第5トレンチは推定「古墳跡ハ」に該当する。一筆の地割だが、西側半分の標高が高く、畠として利用されている。土地所有者から平成になってからの盛土であることを御教示頂いた。5ヶ所の壺堀を実施したところ、盛土されていない東側3ヶ所では現地表下20~30cmでソフトローム層、以下ハードローム層、暗褐色土層、黒褐色土層が確認された。黒褐色土は腐植質で縦縞状の植物痕に入る。盛土部分は約80cmの客土直下が暗褐色土層であった。いずれからも遺構、遺物は検出されなかった。

第6トレンチは「古墳跡口」に該当する。東側長さ13m、西側長さ15mのトレンチを設定した。表土下約25cmでローム面が検出されたが、西側で傾斜し、西端は表土下60cmであった。東側で1ヶ所、西側で1ヶ所トレンチにほぼ直行する溝跡が検出された。いずれも幅約1m、深度約10cm。表土(水田土)直下から掘り込まれていたが、覆土は崩壊ロームブロックを含む軟質の黒色土で近・現代の所産と考えられる。

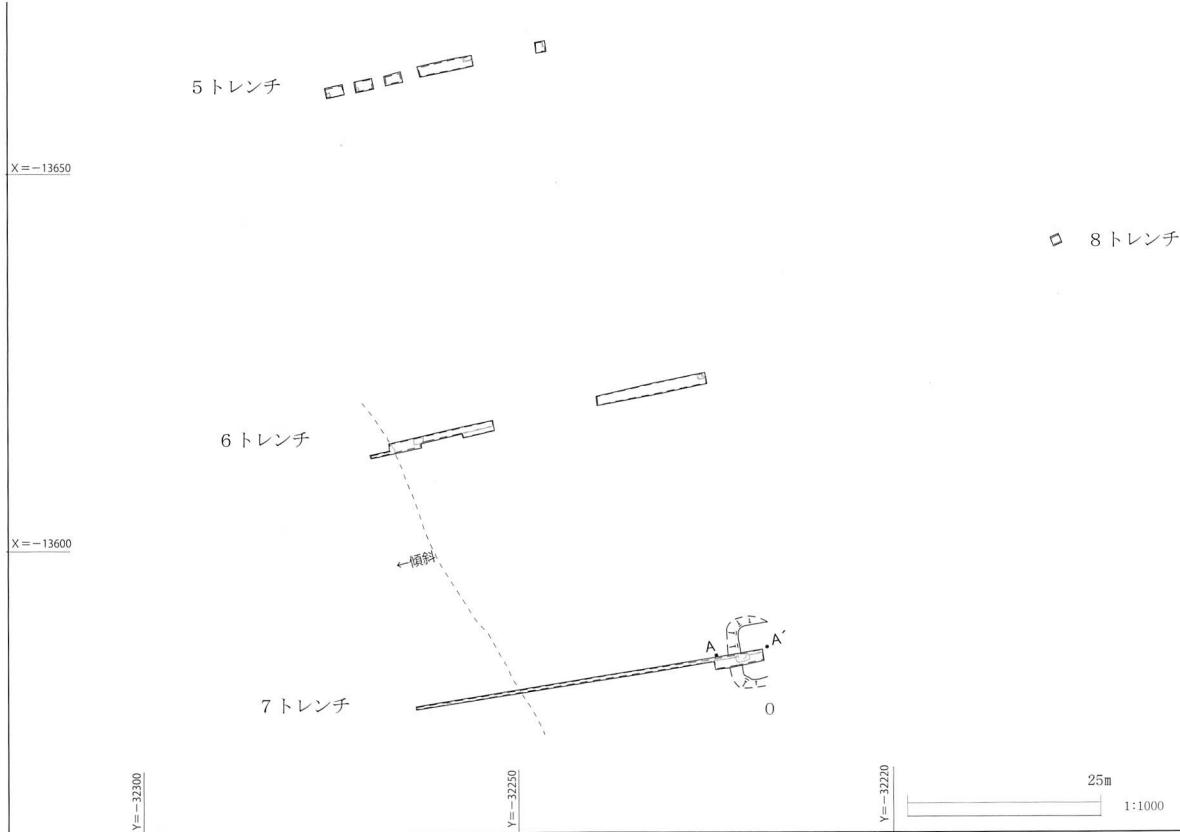
第7トレンチは推定「古墳跡イ」に該当する。現況は行田市道(未舗装)から一段低い水田に向かい張り出す方台状の高まりである。また隣接する未舗装の市道も、その高まりに一致し、わずかに地彫れが認められる。方台状の高まりの中央にトレンチを設定し調査を行った。第4図のとおり現地表下はII、III層が漸移層、IV層以下がローム層であった。ただし周辺の調査で判明した層序との色調、含有物からの対比は困難である。あえて色調の明暗で対比させるならば、IV層=ソフト化が進行したローム層、V層=黒色帶となる。そうであれば第2図のB地点、C地点の黄褐色のローム下の暗褐色土のレベルと概ね一致する。なおV、VI層は極めて硬緻である。したがって方台状の高まりは人為的な盛土ではなく、水田造成の際の地山の削り残しと考える。第I層から第5図の壺形土器片が出土した。器面は摩耗しているが、外面に赤彩が認められる。時期は概ね古墳時代前期と推定する。

高まり以外の現水田内では、表土下20cmでV層ローム面となるが、ほぼ中央以西で緩やかに傾斜することが判明した。この落ち込みの肩は第6トレンチ西端と対応すると思われる。ただし、ローム層の上には水性堆積層は検出されなかった。なお第6トレンチで検出された近・現代溝跡と同一と考えられる溝が検出された。

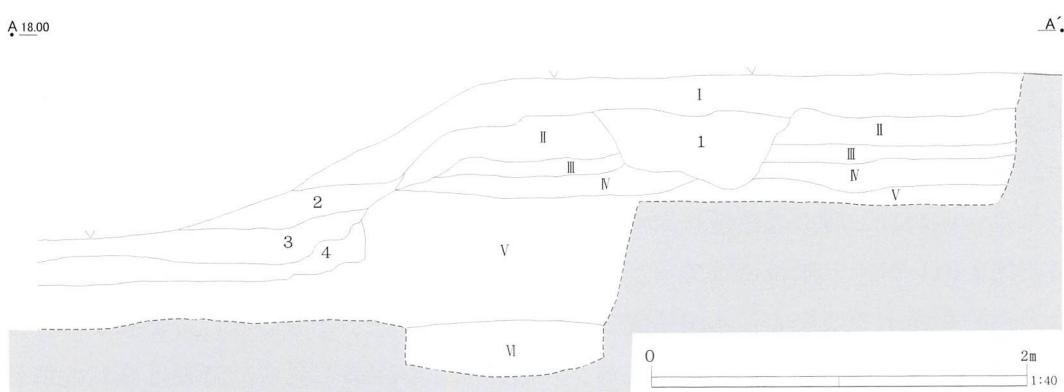
第8トレンチは古墳跡所在推定箇所から離れるが、旧地形を把握するために設定した。地表下30cmで良好なローム面を検出した。

周辺の基本層序について

第2図は平成19、21年度の確認調査及び鉄砲山古墳、奥の山古墳の調査成果⁽¹⁾を元に作図した周辺の基本層序である。テフラ(AT火山灰)分析等実施していないため黒色帶については、正確な対



第3図 第5～8トレンチ 平面図

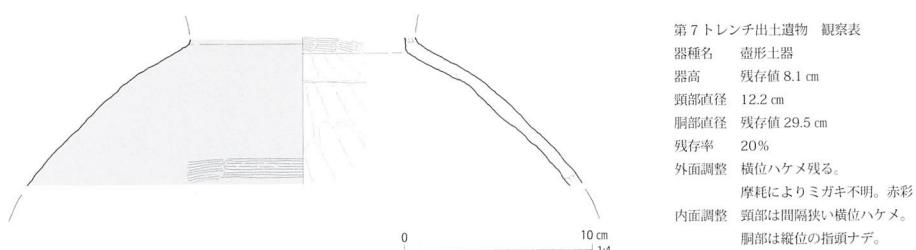


第7トレンチ（高まり） 土層誌

- 1 暗褐色土 (7.5YR3/3) 攪乱。1層土に崩壊ロームブロック多量含む。
- 2 黄灰色土 (2.5 Y5/1) 現代水田関係土。暗褐色土ブロック少量含む。
- 3 暗灰黃土 (2.5 Y5/2) 現代水田関係土。暗褐色土ブロック多量含む。
- 4 灰色シルト (10 Y5/1) 水田耕作土。

- I 暗褐色土 (7.5YR3/3) 表土。根攪乱顆粒
微量のローム粒子含む。
- II 暗褐色土 (7.5YR3/4) 部分的にブロック状に鉄分付着。ローム粒子微量含む。
- III 褐灰色土 (7.5YR4/1) ローム層だが土質不均一。鉄分が植物根状に入る。
- IV 明黄褐色土 (10YR6/6) ローム層。鉄分による酸化顕著で植物根状の縦方向の混入多し。
- V 褐色土 (7.0YRA/4) ローム層。極めて硬い。
- VI 橙色土 (7.5YR6/6)

第4図 第7トレンチ 断面図（部分）



第5図 第7トレンチ 出土遺物

比はできないが、I層客土、II層古墳時代表土層、III層ソフトローム、IV層黄褐色ハードローム(III、IV層が分離できない箇所あり)、V層暗褐色(もしくは灰褐色)、VI層黒褐色(もしくはV層より色調暗い暗褐色)である。V、VI層が黒色帯となるがATとの関係等は今後の課題である。ただし各トレンチの層序は色調の変化に整合性がある。V層は奥の山西側の現水田地帶で約1m急激に低くなり、B地点で最深となり武藏水路に向かい再び上昇する。なお平成19年度のBトレンチの調査所見はIV層、VI層ともB2東側が最深となり、西に向かい上がっていき、B4西端からB5にかけては表土直下で良好なローム層が検出されており矛盾はない。したがって埼玉古墳群と武藏水路の間の水田地帶は凹凸があるものの埼玉古墳群ののる台地と同様の層序をなす(埋没)ローム台地であることが再確認された。なお墳丘直下の古墳時代地面のレベルからは、西から東に向かって緩やかに下がることも判明している。

調査のまとめと今後の課題

以上、調査の結果、古墳や塚等に関連する遺構、遺物は検出されなかった。至近の奥の山古墳では第1図E地点の内堀底面は標高17.6mであり古墳時代地面から1.4m掘り込み、概ねV層の下位が底面となる。大雑把に計算すると今回調査した水田域もIII層上にII層古墳時代表土層が同程度(50~70cm)堆積していれば、概ね古墳時代表土から1m以上、言い換えるとV層土を掘削する深度の遺構は遺存する可能性があった。

埼玉古墳群の梅塚古墳等の小円墳跡の場合、周堀底面の標高は概ね16.8m前後である。隣接する丸墓山古墳で検出された古墳時代旧表土標高18.3mから1.5mの掘削がされた計算になる。したがって今回の限られた範囲の調査で断言することはできないが、迅速図、公図等で示された高まりは古墳ではなく、周堀を伴わない塚の可能性が高くなったと言える。

埼玉古墳群周辺の地形把握については、行田市教育委員会の周辺の確認調査データも隨時ご提供頂きながら、ロームの有無、谷地形等を図面上に落としているが、隣接地であっても状況が異なる箇所が多い。周辺の地形把握は途についたばかりである。より微細な地形を把握するには地質学的な土壤分析、あるいは理化学的な年代測定等が必要であろう。

《註》

(1) 平成24年度報告書刊行予定

《引用・参考文献》

西口 正純 2009 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第3号 埼玉県立さきたま史跡の博物館

西口正純・佐藤康二 2010 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第4号 埼玉県立さきたま史跡の博物館

高木豊三郎 1936 『史蹟埼玉』埼玉村教育委員会

杉崎 茂樹 2006 「埼玉古墳群陣場地区所在古墳についての覚書」『調査研究報告』第19号 埼玉県立さきたま資料館



第 6 図 確認調査位置図



H21- 1 トレンチ



H21- 2 トレンチ



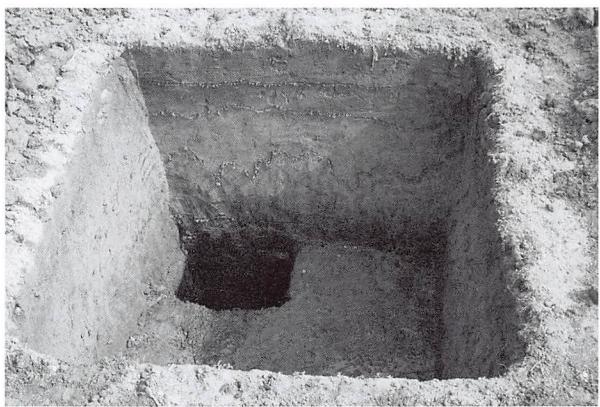
H21- 3 トレンチ



H21- 4 トレンチ



H21- 5 トレンチ



H21- 5 - 1 トレンチ



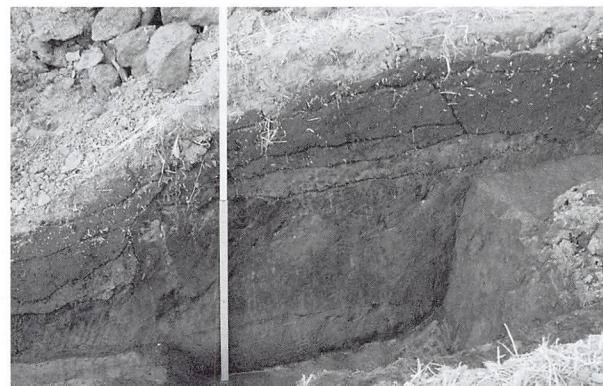
H21-6 トレンチ（西側）



H21-7 トレンチ



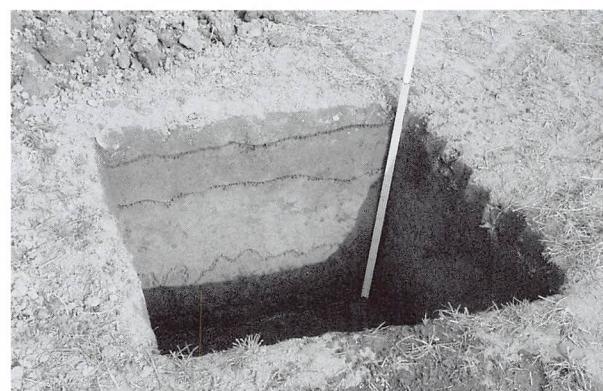
H21-7 トレンチ方台状の高まり（調査前）



H21-7 トレンチ方台状の高まり断面（1）



H21-7 トレンチ方台状の高まり断面（2）



H21-8 トレンチ